わだち

株式会社 西村交益社
やまぶきカード会員情報誌

Vol.08

やまぶきカード会員募集

つるぎ会館でのお葬儀・法要が会員価格で！
但馬内50店舗のお店でお買い物がお得に！
QRコードから簡単にご登録できます。

登録無料

お申し込みフォームはこちら

つるぎ会館

株式会社 西村交益社

ホールのご予約・お問い合わせは
0120-62-5909［つるぎ会館］

〒667-0044 兵庫県養父市八鹿町国木133-1

www.koekkisha.info

アクセス便利 !!
八鹿駅から車で約10分
八鹿氷ノ山ICから500m

スタッフ募集
パート・アルバイト　週1日1時間から
正社員も同時募集中！　まずは上記までお電話ください。（担当／岡本）

わだち Vol.08 ／ 2021 Winter Spring　編集・発行 株式会社西村交益社 つるぎ会館「わだち」編集室

わだち

Vol.08

個人商店
地域に愛されるお店
日本玩具博物館特別展のご案内
ブラジル滞在記／密祐快
花とブルース／伊藤雄大
音楽室だより／中嶋由紀
おしえて！戌亥先生
協力店ショップガイド
インフォメーション

2021
WINTER
SPRING

表紙写真／花日和（養父市）　撮影／河内友久

「わだち」に込めた思い

（株）西村交益社つるぎ会館

ある日、会館を訪ねて来られたご夫婦。
「自分達の葬儀の事を相談しておきたい」との事でした。
ご主人が困難な病気と闘っておられる事、二人の娘さんは、
それぞれ嫁がれて、遠くにお住まいであること・・・など、
ご事情をお聞きしてから
プランの内容や式の流れ、費用など提案しました。
話が終わり、コーヒーをお出しすると、
「よしっ、これで終（しま）いは、決めた。あとはこれからどう精一杯生きるか。
コーヒーが特別美味しく感じるわ。」とおっしゃいました。
そのことがずっと胸の奥にあり、当社にその「これからの人生」を
少しでもサポートできる事がないかとの思いから、会員カードを作ったのです。
まだまだ発展途上ではありますが、もっとお得で便利なカードにしていきたいと
思っております。

「わだち」は、車の通ったあとに残る車輪の跡の事です。
古代ローマ遺跡を旅した時、何千年も昔の馬車の跡がくっきりと残っていました。
会員の皆様が歩んでこられた、尊い人生がそこに重なるように思います。
会員情報誌の名前を「わだち」にしたのはその思いがあったからです。
「今日という日は、残りの人生の第一日目である」
私達のこの「わだち」が少しでもお役にたてることを願って。

個人商店

養父市の中心部、八鹿町には長い歴史をもつ商店街がある。昔ながらのお店に新しいお店といろいろあるが、まち歩きしながら、ふと思い出の商店街が頭に蘇ってきた——。

それは、社会人2年目から4年間暮らした東京の中心から少しはずれたまちの商店街。駅から家まで歩いて15分。その帰り道の間ずっと続く、住宅地の中ののんびりとしたところ。

私が利用していたのはもっぱら休みの日で、朝からお気に入りのパン屋にパジャマで出かけ、昼からは八百屋と肉屋と魚屋をハシゴした。特に通ったのは肉屋で、看板おばちゃんのお勧めを聞いて、使ったことのない部位を買っては肉料理に挑戦したりした。この肉屋は朝早くから夜遅くまでやっていて、朝はおばちゃんに見送られて会社に向かい、帰りは揚げ物を買って家路に着くのが定番だった。知り合いがいないそのまちで「今日も遅いねー」「おばちゃんもねー」「揚げ物温めておいたからー」なんて会話に、ヘトヘトに疲れた気分が救われたりした。

毎週の楽しみは、老舗の銭湯に早めの夕方から行き、ジャグジーに浮かんで日々の疲れを落とすこと。銭湯の後に、創業62年のとんかつ屋でがっつりロースカツ定食を食べられたらフルコースで、いつもついている笑点を見ながら生ビール片手にゆったり過ごす時間は至福の時だった。

仕事帰りにど〜しても呑みたい時には酒場にふらり。ここで出会ういろんな職業の人たちと日々のたわいもない話をし、会社では言えない愚痴、人生相談なんかをして外の世界と繋がっている気分になった。

振り返るとこの時の私は、暮らしのほとんどをこの商店街で過ごしていたと思う。そこに住む人たちとの血の通ったやりとりとか、自分だけの店の楽しみ方を開拓するのが楽しかったんだ、と今になって思う。

そんなことに思いを巡らせながら、あまり探検したことのない八鹿町の商店街をぶらり。このまちでも面白いお店、人に出会いたい。

地域に愛されるお店

養父市八鹿町

八鹿の商店街の歴史は50年以上。歩いてみると、個人の家電屋にメガネ屋、お茶屋などなど、いい雰囲気の商店が並んでいた。「?」の商品がある自販機、道端の「カリン、ご自由に」など、商店街の途中にも面白いものがあってつい足を止めてしまう。

散策していると、静かな佇まいながらも人がひっきりなしに出入りしているご飯屋さんを見つけた。創業50年、地元の人に長年愛されている食堂「めし八」だ。常連さん、近所で働く人たち、学校終わりの女子校生、お昼時、お店はたくさんの人で賑わっていた。

人気メニューは鍋焼きうどんととんかつ定食、そしておでん。地元の人に混ざりながら和やかな雰囲気で食べるご飯に、お腹も心も満たされた。昔通っていたとんかつ屋を思い出して懐かしい気持ちになった。

めし八を出ると、近くの洋服屋ではおばあちゃんがお店の人と井戸端会議に花を咲かせている。鮮魚が美味しそうな商店では地元のお客さんが買い物をしていた。のんびりとした平日の昼間。歩くのが楽しい。「花日和」という花屋さんの店内には色鮮やかな花が並び、石鹸の香りがする造花もあった。地元の人が贈り物をするときによく利用するらしく、ちょうど若い男の人が贈り物の花を買いに来ていた。店主の粋な計らいで、贈り物に使う風船がしぼんだ時にはヘリウムをおかわりできる券を配っているそうだ。

花日和から少し歩いた場所には「ペア」という商業施設がある。昔は、週末は家族連れに大人気だった場所のようで、今では16軒のお店がここに入っている。40年も前からペアに店を構える「山下花店」には、お花の先生がお稽古用の花を買いに来るなど、長年の付き合いのお客さんがたくさんいるようだ。長く続くお店がある中で、数年前に新しく入ってきた店もある。フルーツジュースバーの「だんだん」。ここの売りは、旬の果物を使った生搾りジュース。生まれ育った八鹿を盛り上げたいと始めたお店では、ジュースのほかにも地元の人が手作りした雑貨も販売していた。子連れのお客さんなど、「だんだん」目がけてペアに新しいお客さんが来るようになったそうだ。

昔に比べてお店の数が減ったというこの商店街だが、今回歩いたどのお店にもまた行きたいと思わせる魅力があった。レトロな雰囲気のカラオケ店、新しくできた焼肉屋などなど。ちょっと気になるけど入れなかったお店もたくさんある。八鹿の商店街、まだまだ散策しがいがありそうだ。

花とブルース

「元ヤンチャの番頭さんが、ヤンチャの後輩に伝える植木屋の心得」

植木屋の年末は忙しい。1度は引退したはずの僕も、勤めていた植木屋さんに呼ばれて秋から年末にかけては、農業のあいまをみて剪定仕事（「葉刈り」という）の応援に行く。

かつては、親方や先輩たちが刈り散らかした枝葉を掃除する「坊主」にすぎなかった僕も、いつの間にか、憧れだった松の剪定をしている。もやしっこで、ド文系の僕でもできるんだから、人間やればできるもんや、と、声を大にして言いたい。

僕に松の扱い方を教えてくれたのは、僕と同じように応援に来ているFさんだった。宝塚の有名な植木屋で番頭を20年ほどしていたそうで、一緒の現場になると「こっち来てみぃ」と、休憩時間のたびに指導してくれた。

植木屋に入ってくるヤンチャな青年たちを番頭としてまとめてきただけあって、教え方がうまい。基本的なことはすぐに覚えられた。

Fさんの風貌はアイパーで茶髪だ。気さくなイイ人だが、ドスの聞いた声と、徒長枝を切ることを「イキリは先に潰してまえ」と表現する感じや、ときどきチラッと見える金色のネックレスなど「元ヤンチャ」のオーラが漏れ出ていた。

「昔、ヤンチャしてましたよね？」と聞いても「バイクが好きだっただけや」とはぐらかされていたが、新年会に登場したFさんは、普段のチョッキとは違い、つるつるのダブルのライダースを着ていた。指には判子のような金色の指輪、腕には金色のデイトナ（時計）が光っていた。バリバリのバリだった。

「わしゃ、伊藤君くらいの時には、ドカン履いて、般若背負って（特攻服のようなものか？）、扇子で仰ぎながら祭りに行っとったど」という描写にカルチャーショックを感じつつ、僕の予想とは違って、Fさんは「元ヤンチャ」よりもちょっと上だったことを察した。

「オイ、ヤンキー！　……お前、可愛らしいのぅ」とFさんがN君に絡む。高校1年生の時からバイトで来ていたN君、バイクを買うためにバイトを続けていたところ仕事が楽しくなり、植木屋になろうと思い立ったらしく、造園の専門学校に通い始めた。

進路を聞かされた若親方は、感動のあまり、その日は泣きながら晩酌したという。

同じヤンチャのニオイをN君に感じたFさんは「お前に、いっちゃん大事なことを教えてやる」と語り出した。

その一　どの家でも茶菓子を出してくれるやろう。大工さんや内装屋さんにもそんなことはせぇへんぞ。植木屋は、そういう仕事なんや。心して仕事せえ。

その二　一番難しいのは松や。技術云々やのうて、その家で一番大事な木やからや。覚悟せぇよ。

その三　ピアスはええけど、現場に行ったら外せよ。モンモンも入れるな。お施主さんを怖がらせてエエことはない。

その四　お前さんより年上の後輩ができることがある。絶対負けるなよ。お前は腹決めて専門学校まで行っとるんやから、誇りを持て。

その五　真面目な植木屋いうたら10％もおらん。テキトーな仕事する現場にいつか必ずでくわす。そんなときは、わざとアホのふりせえ。真面目やってバカにされても、お前はお前の仕事をせぇ。

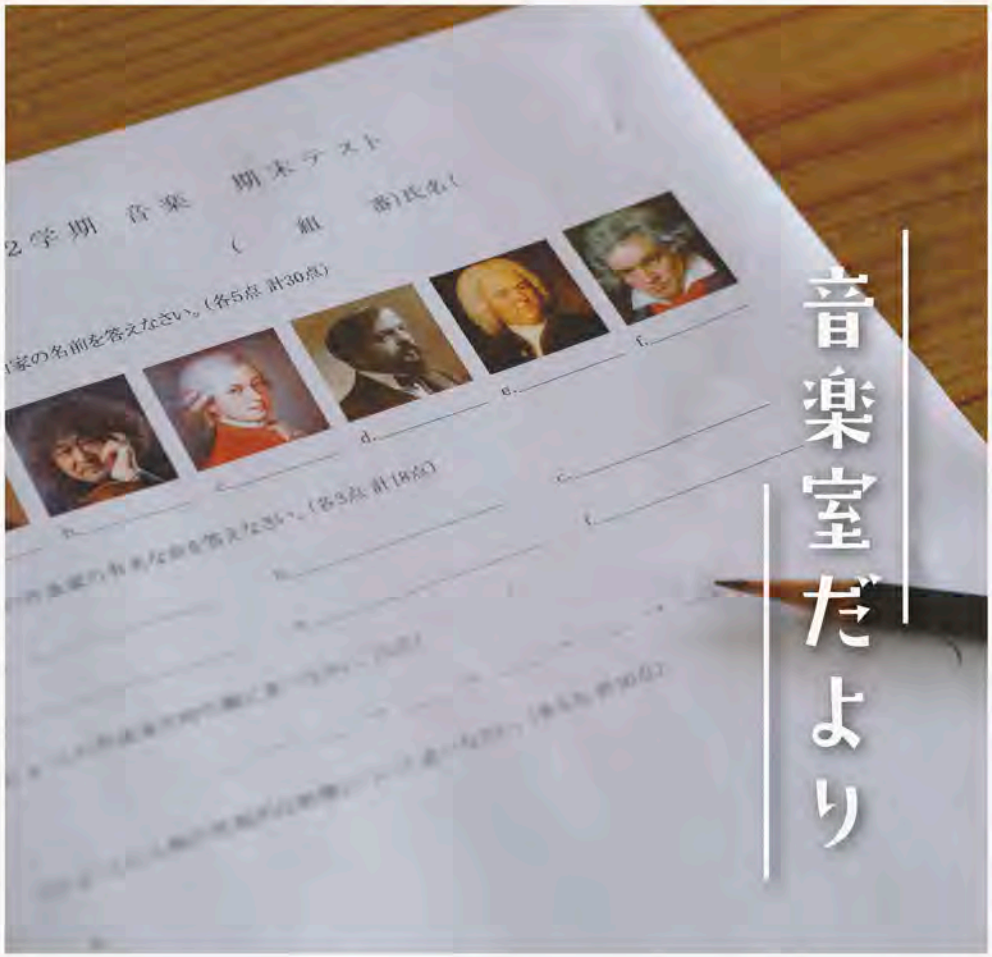
以上、Fさんの語る五カ条を、背筋を伸ばし、太腿に手を添えて拝聴するN君。Fさんのライターが空打ちしたら即座に自分のライターを差し出し、ビールが切れたらすぐに注ぐ、という気遣いも欠かさない。前髪ばかり気にしていたN君も、すっかり大人の世界の住人になった。N君もいつかは「お前にいっちゃん大事なこと教えてやる」なんて後輩に語るのだろうか。

僕の人生の延長線上ではきっと見ることができなかった光景が広がる、植木屋の新年会であった。

伊藤 雄大（いとう ゆうだい）

1985年生まれ。大阪府能勢町在住。東京での農業系出版社勤務をへて、能勢町で植木屋に就職。現在は、農業・農家取材・植木屋の3足の草鞋で生きている。
instagram@yudai_itou

音楽室だより



期末試験の勉強をしていた中学生の娘が、「美術の試験範囲だから」と、世界の名画を覚えながら「こんなこと覚えて何の役に立つのか！」と、いかにも試験中な逆切れ発言をするので「教養だよ、教養」と、こちらもいかにもな返事をしてみたのは、昨夜のこと。確かに「このシャガールの色彩感は、日常の疲れを癒してくれるわ」なんて会話を日常でしたことは未だかつてないのだから、娘の言うこともあながち間違ってはいないな・・・と思ってみたり。

私にとって音楽のテストは、生活必需品のようなものでしたが、多くの人にとっての音楽のテストは、かなりどうでもいい存在だったでしょうね。「音楽の授業で音楽嫌いになった」なんて話は、よく聞きます。クラシックの作曲家の名前なんて、やたらと長いし難しい。教科書通りに書かないとダメっぽいけど、どっちがヴェーでベーなのよ、ベートーベン！赤いスカーフ巻いた、頭ボサボサのオッさんやがな！と、再び無駄に毒づいたところで、子供達には、ある共通の疑問が生じるようです。なぜベートーヴェンより左側に貼ってある肖像画の人は髪型が違うのか。バッハとヘンデルは四角いクルクル、モーツァルトとハイドンはリボン付き白髪ロン毛（当時私はそういう認識でした）なのか。

なぜか。答えは簡単。カツラです、あれ。当時はあまりお風呂に入らず、皆頭を剃って流行のカツラをお洒落としてかぶっていました。その話をすると子ども達は皆キラーンと目を輝かせて喜んでしまいます。壁の偉い人からちょっと身近な人になるのでしょうね。

そんなベートーヴェンですが、２０２０年は生誕２５０周年。本来ならあちこちでオールベートーヴェンのコンサートが開催されたはずなのに、世界中でずいぶんコンサートは中止になったことでしょう。ついてないな、ベートーヴェンと勝手に気の毒な気分になっています。

ベートーヴェンと言えば、ジャジャジャジャーンの冒頭「運命」（ちなみに「運命」とご本人が名付けたわけではなく、その名で呼ぶのは日本だけ）や、年末になると日本ではやたらと耳にする「第九」で有名です。きちんとしてずっしりしたイメージですが、なかなか気難しく変わった人物だったようで三枝成彰さんの著書「大作曲たちの履歴書」という本によれば

●コーヒー好きが高じて豆の数を数えて入れていたり

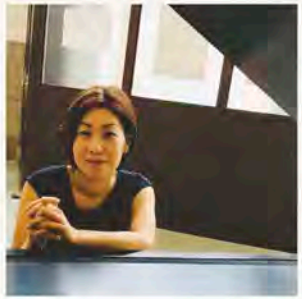
●卵が好きすぎてメイドに10数個の目玉焼きを作らせ、気に入らないことがあればメイドの背中に生卵を投げつけたり（のでメイドはすぐやめてしまう）

●やたらと部屋が汚く、なおかつ頭から服を着たまま水をかぶって入浴するので、階下に水漏れしアパートをすぐ追い出されたりしていたそうです。

ベートーヴェンを弾いていると、とにかく正しい己を要求されます。そして何回も同じことを言われる。娘の試験期間中の私と同じく、くどくどしつこい。しかし、たまに天使みたいに美しいメロディーが出てきたりして、飴と鞭な音楽。音楽を「芸術だ！」と主張したのも実は彼が最初です。それまでは職業としての音楽屋さんだった。ベートーヴェンがいなければ色々なことが随分違っていたのかもしれません。

と、今回はすっかりベートーヴェンの話になってしまいましたが、名曲を残して有名になれば、２５０年経った今でも何歳の時の女性関係がどうだったか、なんてことまで解明されてしまう。いいんだか悪いんだか、などと思ったりもして。晩年難聴がかなり進んで、演奏後の聴衆の拍手が聞こえず弟子に教えてもらっていた、などというエピソードも残っています。

コロナ禍でコンサートやライブが配信されたり、小学校の音楽会が録画して家庭に配布されたり。新しい形ではあるし、この先はそういうスタイルがどんどん進んでいくかもしれないけれど、演奏後の拍手が演奏者や子ども達に届けられないのは何とも寂しいですね。拍手は一番のご褒美なのに。秋の間は久しぶりにお客様を目の前に演奏して、同じ空間で一緒に過ごすからこそ生まれる音楽があるんだなと改めて実感しました。この冬はどうやら再びちょっと寂しくなりそうです。皆様よい一年を。



中嶋 由紀（なかじま ゆき）

ピアニスト。豊岡市在住。地域密着型ミュージシャンとして様々な活動をしている。一般社団法人ワンノート豊岡を立ち上げ、代表理事として地域のコンサートなども企画。事務所兼喫茶店でコーヒーも淹れている。

おしえて！戌亥先生

Q

子供の頃、村祭りが平日であれば、その村の子供は、お休みか半ドンでした。子供の頃は楽しみだったお祭りですが、そもそも何のために行われているのでしょうか？

日本の宗教風土のベースになっているのは、民族宗教である神道（神社）です。

今の仏教は、これらの神々の助力によって、日本に根をおろしました。キリスト教は、これらの神々と握手できなかった為に、土着化を果たせていません。神道は、日本人にとって身近な存在です。例えば、初詣の参拝は、約６５００万人が神社仏閣を訪れます。国民の3分の2が神社への参拝をします。この様に神道は、日本固有の民族宗教として日本人の生活の中に生きています。

神社の祭神にはそれぞれ専門があります。神社の延喜式に「大祓詞（おおはらいことば）」がありますが、これは行事や祭典などによく用いられますので、一度は耳にされたことがあると思います。「高天原に神留り坐す・・八百萬神等を神集へに集へ賜ひ」とあるように神道は、多くの神々を祀ってきました。

神社にまつられる祭神には、皇室・民族の祖神・氏神・産土神・農業神・商業神・水神・学問神・福徳神・武神・延命神・縁結び神などがあります。

神道では、仏教の僧侶にあたる人物を神職といいます。寺の責任者を住職といいますが、神社では宮司といいます。その下に禰宜・権禰宜などの階級があります。又神社にはそれぞれ「社格」があり、中でも「神宮」だけが別格とされています。これは神宮が皇室の祖神を祀る神社だからです。このため神宮の神職だけは神官と呼びます。

神社の建物（社殿）は入り口から順に、拝殿・幣殿・本殿の3つに大きく分かれます。本殿は神の鎮まる在所です。拝殿は一般の参拝者の席で本殿と拝殿の間に有って、神への捧げものを供える所が幣殿です。

鳥居は神社の顔です。鎮守の森の入り口に鳥居が建てられています。参道の入り口にあって神域の境界を守る関所の役目をしています。神社で詣でるには、まず手水舎に寄って心身を清めます。そして順に柄杓の水で左手を洗い、次に右手を洗い、更に左手で水を受けて口をすすぎ、最後にその手を今一度洗う要領です。次に拝殿に進みお賽銭をあげ鈴を鳴らして、二拝・二拍手・一拝の順で参拝します。

神事は信仰そのものの行為すべてをいいます。古神道における自然的な神体や祠塚、道祖伸、地蔵などに手をあわせたり感謝したり、お供え物を奉じれば総てが神事（かんなぎ）です。庶民的な行事の祭りや禊（みそぎ）、祓い（はらい）なども神事であり、また演舞なども神事であることが多く、神楽が神事舞の代表的なもので巫女の舞や獅子舞、能楽なども神事の要素を含んでいます。

また社会的な、起工式、竣工式、除幕式、開通式、安全祈願等々も広く神事であると解釈されます。

神事には

1）神社自体が行う祭（例祭、祈年祭、新嘗祭 等）

2）氏子崇敬者の依頼に基づき行う祭り（入学、就職、お宮参り、七五三、厄除け、安産、病気平癒、五穀豊穣、無病息災 等）があります。

皇室神道としては天皇や神に捧げる神事もあります。

祭り（神事）は各神社の祭神を中心にして季節ごとに催される神事です。おごそかな祭りが執行された後に神と人との交流がなされます。春・夏・秋祭り、七夕祭り等、日本の祭りは神事として営まれます。そこでは神と人が通う交流風景や住民と氏神が手を携えて生きてゆくための協力を約する宴などがみられます。日本人は神との饗宴によって、生活における区切りや、節をつけてきたのです。

コロナ禍で迎える初めての年明けだけに、収束を願って祈りをささげる方もおられると思います。三が日にこだわらない、分散参拝を心掛けたり、「幸先詣（さいさきもうで）」をされたりしてもよいのではないでしょうか。

冠婚葬祭コンサルタント

戌亥 正三郎

関西テレビ・毎日放送でもお馴染み、業界第一線で活躍中の冠婚葬祭アドバイザー。終活セミナー、エンディングノートの講師で日本中を駆け回る超多忙な毎日。また、日本のしきたりや食育の講演も多く、全国のセレモニーホールで新人研修にもあたる八面六臂の活躍ぶり。2009年より弊社顧問。